



## 人々を魅了する透明感

甲南高校二年 古井 進之助

近年、社会では様々なテクノロジーが目にも留まらぬ速さで発展してきている。そういったテクノロジーの発展を私たちに体感させてくれるものの一つが、スマートフォンやスマートウォッチ等のガジェットである。それらを用いることによって、私たちの生活もまた変化している。そんな変化の中で私が特に注目しているのが、キャッシュレスやワイヤレスといった目に見えるシステムが、見えなくなるような変化である。

キャッシュレスという言葉が頻繁に耳にするようになったのは、消費税が十パーセントに増えたときからだ。増税してしばらくの間はアプリケーションソフトや、クレジットカードを用いた、所謂キャッシュレス決済をすることで、数パーセント分の金額がポイントとしてキャッシュバックされるという制度があった。それを期にキャッシュレス決済が目に見えて広まっていったと私は感じる。現在、様々な場所のレジで「ポイントが

ある。それらが、目に見えないだけで、存在はしているということに、意識が向けられることはない。人間にとって大事なもののまで「レス」化されてしまうといったリスクは「レス」という言葉で埋めつくされた社会にきつと潜んでいる、そう私は考える。

しかし、ケーブルやお札といったものが見えなくなるとしても、充電や支払いという行為が確かに行われていることは目に見えてわかる。スマートフォンに表示される残高の数字や、耳にぼつんと取り残されたイヤホン、ワイヤレス充電器から伸びるケーブル、アダプタ、コンセント。それらの物が存在していることは、行為が確かに行われていると感じさせるものである。しかし、そういったものもいずれ透明化されてしまうのだろうか。

ある行為における媒介物が目に見えている場合、我々はそれの扱い方を覚えようとする。媒介物の扱い方には単純なものも複雑なものもあるが、正しく扱うためには、媒介物の仕組みについて想像力を働かせる必要がある。目に見えるからこそ、想像力を駆使することもあるだろう。しかし、もし仮にあらゆるものの透明化が進んだ社会というものが到来すれば、そこに生きる人々は、物事について考えようとする力が失われる、あるいは、考えることを放棄しようとするようになるのではないかと、私は考える。

思考しなくなることでいつの間にか不利益を被らないよう、

貯まる」というような文字を見かける。ポイントでの決済は私も経験があるが、お金を払っているという感覚があまりにも無く、使いすぎてしまうことを懸念する。キャッシュレス決済は、お金というものの存在をあまり感じさせない。

また、ワイヤレスという言葉は、私がスマートフォンを持つようになってからよく耳にするようになった。例えば、ワイヤレスのイヤホンやヘッドホンは、これからより開発競争が激しくなっていくであろうガジェットのひとつだ。私は初めてそれらを手にしたときに、ケーブルが無くなることによって享受できるそのあまりの快適さに驚いた。頭を振ってもその動きを邪魔することはなく、耳栓としてはしっかりと機能するそれは、今後も使い続けたいと思えるものだった。また、ワイヤレスの充電器というものもある。スマートフォンを何の変哲もない板の上に置いてみると、画面には確かに充電されている証拠が映し出される。ケーブルを本体に挿すことのない充電というのは、快適さを感じるというよりは、充電という行為が無くなったかのような、不思議な感覚に陥る。

こうした、目に見える何かの行為の媒介物が目に見えなくなるとは、媒介物だけでなく、その行為そのものの存在すら認識しにくくさせる。

スマートな暮らしを手に入れた我々は、大抵の作業を、機械に話しかけたり、タブレットの画面をタップするだけで完了させる。その行為に本来不可欠な媒介物は、存在しないも同然で

我々はテクノロジーの変遷を観察すると同時に、物事の媒介物があることを目に見えらるうちに認識し、仕組みについて関心を向けられるようになる必要がある。(森園 隆志先生指導)

(審査員評) 着想がおもしろく、読者を引き込むタイトルも絶妙で、作品内容全体と見事に調和が取れている。魅了されることで無意識に考えなくなりそうな問題点にあえて着目し、誰もが共感する実体験を紹介しながら論理立てて展開し思索を深めている点が秀逸であった。惜しむらくは、レス化によるリスクや不利益として挙げた「想像力の放棄」についての考察が浅かったことだ。もう少し考察を深めることでより説得力のある作品へと昇華できたのではないかと。利便性を追求する現代社会に生きる我々に警鐘を鳴らす秀作であった。